

助成年度：平成7年度

[所属] 筑波大学 教育学系
[役職] 教授
[氏名] 長洲南海男 (他計6名)

[課題]

環境イシューズに対する意思決定能力の育成を図る教育プログラムの開発に関する研究

[内容]

本研究の研究課題は「環境イシューズに対する意思決定能力の育成を図る教育プログラムの開発に関する研究」である。その研究目的は環境汚染や破壊に関しての環境イシューズに対して、学校教育において有効な意思決定が出来る教育プログラムの開発と試行を行うことである。本研究は上記の目的を達成するために1995年9月より始め、1996年12月まで遂行したその詳しい成果は別記の報告書として提出されているのでここではレジュメとして以下にまとめられる。

まず、本研究の理論的側面である。総称としてのこれまでの環境問題を原因が明確で解決可能な狭義の環境問題と以下に規定される環境イシューズとに分けた。環境イシューズとは現時点あるいは将来にわたって、解決出来ないか解決が困難であったり、或いは、未来に新たに出現して、それまでの基本的な捉え方では解決が図れない類の問題の中で、特に河川、湖沼、海水または森林や草原さらには都市等も含めた地球生態系での様々な環境汚染や環境破壊及び各種生物を含めた自然環境の保全等に関連した問題と規定した。既知の問題に対して、その唯一正解の回答を得るのではないこのイシューズに対するには、幾つかの解決案を想定したり、創案して、これら複数の解決案を総合的、理知的判断思考(critical thinking)を働かせて、最善策ないしは次善策を決定する意思決定の教育である STS アプローチを基盤におくことである。さらに、米国の最新の幾つかの科学教育カリキュラムを事例に狭義の環境問題に対しての問題解決の指導、環境イシューズに対しては意思決定の指導のそれぞれの適切性と留意点を明らかにした。この環境イシューズを新しい教育内容として取り組むことにより、従来の教科観を変換させ、学校教育に新しい活力を産み出すことになる。従って、ここに現実の世界のこの環境イシューズに対応できる新しい教育である意思決定の教育の教育的意義が明らかにできた。

この環境イシューズを主にした環境教育プログラム開発の基本的立場として、意思決定を高次の構造化された知的思考体系と捉え、今回開発した具体的な意思決定の指導方法・ツールである「意思決定マトリックス」、「見通しの輪」、「意思決定判断チャート」の学校教育における位置づけを明確にした。

次に、実践的側面として、これら三種の具体的な意思決定の指導方策・ツールをそれぞれ実際の学校で試行評価した。例えば、茨城県の出島村の南中学校で霞ヶ浦の水環境イシューズに絞って2年生、3年生に実践し、それぞれの特色を明らかに出来、生徒からも高い評価を得た。他方、静岡県の掛川東高校の生物授業1クラスにおいて試行した。特に見通しの輪を主に実践した。統計的手法と事例研究両者より分析した見通しの輪の特徴と今後への反省点も明らかにできた。

諸外国の環境教育の事例として、ドイツの初等学校のザッハウントリヒトの教科書の大気汚染を分析して、その内容構成と多様な指導方法が環境問題の理解のみならず、行動力や社会的能力の育成の具現化にふさわしいことを明らかにした。

他方、ニュージーランドを主にその他の諸外国も含めた社会科地理における環境教育の特徴の解明を踏まえて、日本の改善策を提言した。

以上より、当初に述べた本研究の目的はほぼ達成されたと見做せる。